
短編集

紫苑 璃苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N3476K

【作者名】

紫苑 璃苑

【あらすじ】

作者が見た夢や、日常生活で思いついた小話などの寄せ集めです。

夢の話

私達は敵を倒す為にここに来ていた。十人弱の人数だが、皆腕に自信のある者ばかりだ。

一階は鎮圧できたが、二階へ上がった途端エスカレーターの手は敵のボスが現れ、兵も一個大隊（一千人）ぐらい出てきた。

「これでは全滅するぞ。」

「しかたがない、ここは一旦引こう。」

という事になり、私達は皆バラバラに散らばって逃げ出した。

途中まで私も誰かと一緒だったんだけど、いつの間にか一人になっていて、ある狭い一角に逃げ込んだ。

そこは文化祭の時のようなダンボールで作られた看板がかかっていて、右手の方には“ホテル”と書かれていた。そっちは装飾がド派手で入る気もなかったもので、左手にあるウエスタン風酒屋のドアを押して中に入った。

中は外見とは裏腹に、訳のわからない海底とSFの宇宙惑星を組み合わせたような飾り付けのお化け屋敷っぽい所だった。

（あーやばそうだなー）と想った私は、深く息を吸い込むと、

「わっ！」

と大声を出した。するとそれにびっくりしたのか声に反応して出てくる仕掛けだったのか、バツ！と何十本もの人の手が壁から飛び出し、もの欲しそうに腕や指をうごめかせた。

私はもうこれ以上は出てこないだろうと思って、手の波を避けな

がら斜面を進んだ。その間、手が人の足をベタベタ触って捕まえようとしてきたので、

「セクハラ！セクハラ！」

と手で払いながら、異様に軟らかい床を行かなければならなかった。

そこを越えると開けた荷物部屋に出た。私は裏口を見つけて外へ出る。

半数になってしまった仲間と合流して隠れられそうな町を探しているうちに、青紫がかった黒っぽい髪の毛、動物の骨をお面にした男に会った。彼と話した結果、逃げながら戦力を集めてもう一度襲撃する事になった。

私は一人で走っていた。獣道を抜けて木の影に身を隠す。

ほっと一息吐いたのもつかの間、後ろの方で話し声が聞こえた。

そっと顔を覗かせると、体操服を着た少年が三人頭を寄せ合ってなにやら話し込んでいた。

はたと目が合った。やばいなって思ったけど、今は疲れ果てていて動く事もできない。私は彼らに「誰にも言わないでね」と言っ
て頷くのを確認すると、頭を引っ込めてしばしの眠りについた。

足音と人の気配に目が覚めた。まぶたを落として一秒と経っていないようで、体は余計に疲れている。

さっきの少年達よりもいくらか年上で、褐色の肌を持つ男の子が鋭い目つきで私に向かってくる。

私が危険を感じてさっと立ち上がると、彼は持っていた石を投げつけてきた。私が反逆者の一味だって事がもう広まっていたんだ。

私はその石をギリギリの所で避けて、石を投げ返す事しかできなかった。それもしだいに動きが鈍くなり、石が体のあちこちに当たるようになってくる。

私は一か八か彼を説得してみた。話を聞くうち、彼は我らが敵の真相を知り、仲間になってくれると言った。先程の三人も快諾してくれた。

だが、現時は厳しいもので、気付くと私達は三人になっていた。逃げている所を後ろから襲われたのだ。

命からがら逃げ延びた三人は、打ち捨てられた工場らしき建物に身を潜めた。中は薄暗く、ほこりが厚く積もっていた。褐色の男はほこりに足がつくギリギリの所を浮かんで歩き、私と元気のいい少年は床と天井の間を泳いで進んだ。

反対側の出口に着き、外をうかがう。幸い、誰もいなかった。

私達はとにかく前へ進んだ。

どこかにまだ、仲間がいるかもしれない。前に進むしかなかった。

両脇に、今にも枯れそうな草の生えた砂利道をとぼとぼと歩く。長く伸びた草むらの中には、スラップになった車やいろんな部品がごろごろしていた。

不意にエンジン音がしたかと思うと、褐色の男が私と男の子を引っ張って、古い車の陰に隠れさせた。

息を殺してそれが通り過ぎるのを待つ。

ボンネットがやけに平べったい、青緑の車だった。中には十人ほどの男女が、向かい合わせにうつむき加減で座っている。その中の、

私の父と結婚したばかりの従兄弟だけがやけにはつきりと見て取れた。

タイヤのない車は、すーっと滑るように宙を飛んで通り過ぎていった。

私の父親も加わって、血眼になって探し始めたんだ。

その後、私達はまた工場の中に入って、外の様子を窺った。もう褐色の男と私しか残っていなかった。中は暗く、足下に何があるのかも分からないほどだった。

窓から覗くと、トラックのような車が目の前に停まっていた、二人のおじさんが作業服で何か話していた。ハンドルにもたれていた男が顔をこっちに向けたので、慌てて頭を引っ込めた。

少ししてからまた見てみると、もうトラックはなかった。換わりに三十前後のおばさんが、道を渡ってこっちに来るようだった。

私はその事を男に伝えて、隅に縮こまって息を殺す。

——キイイイイイイ・・・

軽く軋ませてドアは開けられた。暗いから私達がいる事には気付かないだろう。そういう願いに近い想いは、ものの見事に裏切り、おばさんはすぐに私達の方に眼を向けた。

おばさんはドアを大きく開け広げてそこに立ち尽くしていた。私は他の人にばれるのを恐れ、無駄だと思いつつ、閉めて閉めてと身振り素振りですその人に伝えた。

すると、予想に反しておばさんは自分の顔を挟み込むように、ギ

リギリまでドアを閉めて、どうしたの？と聞いてきた。私と褐色の男は互いに顔を合わせ、事情をその人に話し始めた。

おばさんに連れられて、江戸時代と見間違えるほど古い下町に着いた。狭い路地の小さな土地に、皆で隠れるように肩を寄せ合って暮らしているようだ。

道を行くと、物珍しそうに家々の窓から顔が出された。だが、そこに見えるのは好奇心ばかりで、敵意を感じさせる視線は一つとして感じなかった。

私は車の中に、褐色の男は向かいの家に入れられ、すぐに食べ物が用意された。そういえば、ここ何日なんにも食べ物をお口にすることがなかった。ご飯は質素なものだったけれど、今の私にはご馳走を食べているように感じられた。

しばらくして、役人が来たと集落中が大騒ぎになった。十四から十八の眼鏡をかけた女を捜していると言う。役人が集落を一軒一軒回っていくうちに、人々は水を打ったように静まり、辺りは張り詰めた緊張感に包まれた。

息を詰める中私は眼鏡を外され、髪分け目を変えてヘアピンで留められた。眼鏡は私の隣に座っていた女の子の背中に隠させてもらった。

役人が来た。

周囲の人に私の特徴を言って、私にいくつだと尋ねる。それに対して適当に二十歳だと答えた。役人はジロジロ無遠慮に私を眺めて、ふと目線を外した。隣の女の子が私の眼鏡を取り出して、いじくり回していたのだ。それを見つけたおばさんは、慌てて私ですと言った。

私は一人で歩いていた。さっきの集落と同じような風景だった。
決定的に違うのは、窓や戸から覗く視線が怯えと軽蔑しきつたもの
のだけということ。

私は、この世界に――

――ひとり取り残された。

夢の話2（砂漠にて）

どこまでも続く広い砂漠だった。

私は乗ってきた乗り物を降りて水を飲んでいた。

（どこまで続くんだろう）

ポツリと独り言を呟くと、どこかからか「どこまでも続きますよ」と声がした。

振り向くと、黒っぽいマントを頭からすっぽりかぶった小柄なヒトがいた。

「旅の方ですか」

マントの彼が言った。

「ええ、あなたは？」

私が聞いた。

「ここに住むものです」

彼が答えた。私はこの辺りに人が住んでいるとは聞いた事がなかった。

「ところで・・・」

彼は言葉に詰まった私に話し掛けた。顔を上げると彼の後ろに、いつの間にか天まで届きそうな細い塔が建っていた。そこはついさっき乗り物で通ったばかりの所だった。

「あなたは釣りができますか？」

彼が話している間にも私の視界の隅で、突然わいたように同じような塔が建ち始めた。

「・・・できますが、それが何か？」

私はあえてその塔を無視して彼に聞いた。

「頼みたいことがあるんです。少々お待ちいただけますか？」

「はあ・・・」

そう言うと彼は、私の横を通り過ぎてまた現れていた塔に向かって行った。その細いと思っていた塔は、人が五人輪になって手をつな

いでも届かないほど太く、トーテンポールのように細かい模様が一部の隙間なく彫られていた。

マントの彼がその前に立つ。腕を上げたのかマントの裾が持ち上がった。けれども、相当長いものらしい。足は全く見えず、砂の上には裾を引きずった跡しか残っていない。

（・・・足跡がない？）

そう思うのが先か、彼の前に人が通れるほどの穴がポツカリと口を開けた。

今気付いてみれば、私の周りには目の前のも入れて、七つの塔が建っていた。等間隔に並べられたそれは、円を描いて正七角形になっているようだ。

マントの彼は、私が目を離れたほんの少しの間に姿を消して、すぐに現れた。

「こちらへどうぞ」

私は招かれて穴の中に入って行った。入るとすぐに階段があって、危うく転げ落ちそうになった。

それにしても急な階段だ。ほとんど垂直に落ちている。しかも中は真っ暗で、明るい所から急に暗い所へ来たものだから余計に見えない。マントの彼といえば、慣れた足取りで滑るように降りていた。何故か彼のマントが淡く光を発していたので、それをわかることができた。

私は眼が慣れるのを待って、ゆっくりと慎重に彼の後を追った。

最初はただ真っ直ぐ降りている階段だったが、しだいに曲線を描いたり曲がり角が出てきたりしてきた。

私が遅れている事に気が付いた彼は、

「慣れない方には辛いですね。どうぞ、ゆっくりでかまいませんから。お怪我をなさらないように」

と、わざわざ私の所まで戻って来てくれた。

二人でゆるゆると降りていった。

やがて、右側が崖になった。微かに水の流れる音がする。

「地下水脈ですか」

「ええ、そこに我々の住家があります」

傾斜がだんだん緩やかになってきた。川の音もそれに比例して大きくなる。

やっと下に着いた。地下は彼のマントと同じような光を発していた。

川の流れの横に小さな岸があった。小さいと言っても川の大きさに対してだ。川はナイルのようにとてつもなく広大で、流れは意外と穏やかだった。そして、何万人もの人が入れそうな岸边には、何万人もの人が入れそうな巨大な船があった。

「我々“レイラク”の住家へようこそ」

マントの彼が言うと、船の中からマントを頭からすっぽりと被った何万人ものヒトが出てきた。やはりそのヒト達のマントも淡く光っていて、皆同じように顔はもちろんのこと、手足さえも見ることはできなかった。

「レイラク？」

私が聞くと、微かに彼が自嘲気味に笑った気がした。なにしろ顔が見えないから、確かとは言えない。

「我々は元々一つのものでした。それがある日を境に四つの属性に分かれてしまいました。あるものは空を好み、あるものは山を好み、あるものは川を好み、あるものはこの世ならざるものを好みました。他の属性と距離を取るようになってきた我々は、自然とグループを作り、自分達の好む場所へと移動しました。

空へ行ったもの達をレイ。山へ行ったもの達をレイノウ。どこかわからない所へ言ったもの達をレイレイ。そして我々の事をレイラ

クと呼ぶようになりました。

我々は流れを糧に存在しています。あなたに我々を助けていただきたいんです」

「助ける？」

何万人ものヒトが一斉に私も方を見た。彼らは何か物言いたげに体を揺らす。

「先程も言いましたが、我々レイラクは流れを糧に存在しています。今はこの地下水路を逆流しているわけですが、それが魚に邪魔されてしまったんです」

「魚に、ですか」

「魚に、です」

「それで釣り？」

「それで釣り」

「はあ・・・」

「お願いできますか？」

「・・・・・・網で捕まえるわけにはいかないんですか？」

言った途端、マントの波がざわめいた。

「釣りでなくては駄目なんです」

「・・・・・・そうなんですか」

何万人もの期待の視線が突き刺さった。やっぱり断ろうかと思っただけ、無理っぽいから私はしかたなく引き受ける事になった。

「ではまず、釣道具を作らないと」

「ああ、道具はあるんです。人数分」

そう言うとき彼は顔を上げて誰かに合図をしたようだ。何人かが船の中に入って行った。そしてすぐに、いくつか竿や針の入った箱を持ってきた。

「何で道具はあるんです？」

「さあ。いつの頃からか船の中に入っていたんです。けれども我々はどうやって使うのかわからないんです」
「なるほど」

私はとりあえず全員に餌になる小さな虫を捕まえるようにと、指示した。

すぐに集まった。

次にいくつかグループをつくってもらった。そのグループごとに代表を決めてもらって、前半後半に分けて餌の付け方を教えた。物覚えのいいヒトが多くて助かった。その代表が同じグループのヒトに伝えて、次から次へと川に釣り糸が投げ込まれていった。

私も自分で釣り道具を作って一緒に釣をした。

マントの彼に頼まれて、今まで回ってきた国々の話をしてあげた。会話ができるのは彼しかいなかった。何故か他の皆は一言も喋らない。何かわからないことがあっても、ジェスチャーで全て聞いてきた。私も何故かすんなりとそれを理解する事ができた。

何万のヒトと私の釣は三日続いた。

私は携帯食を持っていたのでよかったが、彼らが何か食べている所を見たことがなかった。彼らは流れを糧にしていると聞いていたから、川の流れを食べていたのかもしれない。いずれにせよ、不思議な三日間だった。

時々私がもらって食べる他は、魚は船尾へ逃がした。

今から思えば人数を半分に分けて、釣をするヒトと餌を探すヒトと分担すればよかった。けれども、まあ、結果的には成功したんだから、今更後悔しても遅い。

「本当にありがとうございました」

「いえ、私も楽しませてもらいましたから」

もう船が進められるようになったので、お別れということになった。

まあ、釣は嫌いではないのでこの言葉は本心と言っている。しかし、さすがに三日続けてはつらかった。

「本当に、なんとお礼を言ったらいいか・・・」
「いえいえ」

私は出発する船を見送り、長い階段を上って外に出た。さすがに三日も地の底にいと、外の光は猛烈に眩しかったが、新鮮な空気は心地よかった。

おもいつきり伸びをして、肺一杯に空気を吸い込むと、私は隠しておいた乗り物に向かった。そして、

「・・・ちよつと期待してたのになあ」

私の両手には自分の荷物と少しの魚だけ。それを見てさらに眩いた。

「あれだけ手伝ったのに見返りなしかよ」

情けは人の為ならずじゃなかったのかな。

夢の話3（黒ずくめ）

夏の日だったと思う。

私は泳いでいた。それもプールではなく、教室でだ。そう、腰まで水の張った教室で私は泳いでいたのだ。

私の隣には友人がいた。やはり彼女も楽しそうに泳いでいる。あと数人、パラパラとその教室のプールにいたのだが、彼らに水が届いている様子はなかった。ただ平然とそこに立ち、彼らで世間話をしていた。

私は彼らの方を見て――――

ふと気が付くと、わたしは走っていた。足下には草が青々と茂っていて、頭上からは熱く強い日差しが照り付けていた。

鬼ごっこではなかった。必死に走る私は決して楽しそうではなかったし、かといって鬼気迫ると言う感じではなかったのだが、とにかく私は追われていた。先程の友人も隣にいた。二人で必死に逃げていた。

肩越しに振り返ると、この暑い中黒い帽子に黒いサングラス、黒いスーツ、黒いネクタイと、何から何まで黒を着込んだ黒ずくめ達が私たちを追って来ていた。

彼らの表情は決して動かなかった。硬く結ばれた口元はピクリとも動かず、あんな長袖のスーツを着ているのにもかかわらず汗のひとつもかいていない。

私たちはさらにスピードを上げた。

地面がコンクリートに変わった。私の家の通りだ。そこを奥へと

進む。そこに友人の家があった。

「こっちへおいで」

友人のお祖父さんが白い緩やかな坂の途中で、高く盛り上がった蒼いシートをめぐり上げて手招きをしていた。私たちは何にも疑わずにそこへ逃げ込んだ。お祖父さんも中に入って青いシートをピツタリと下ろした。

中にはみかんの木が植えられていて、杉の木のように背が高かった。

シートの中は真っ暗だ。そのわりには人の顔の細かい所まではつきりと窺える不思議な所だった。

しばらくじっとしていると、私たちのすぐ横をあゝ黒ずくめの男達が走っていった。

足音が遠ざかって、シートの端から顔を覗かせる。私が見る限り誰もいなかった。

私たちはお祖父さんにお礼を言って、そこから這い出た。そしてまた走り出す。と、

「――っ！」

さっき通り過ぎて行っただけなのに、また私たちの後ろから黒ずくめ達が追いかけてきた。

角を曲がる。両側に木の覆い茂る狭い道に出た。人ひとりがや々と通れるほどの狭さで、木の枝や葉が剥き出しの肌にピシピシと当たって痛い。だが、そんな事を気にしている余裕はなかった。

いつの間にか前を走っていた友人はいなくなっていたし、相も変

わらず黒ずくめ達は追ってきていた。

途中、何かにつまずいて思いっきり転んだ。
すぐに起き上がってまた走り出す。

左足が痛んだ。だが、私は足を引きずるようにして必死に逃げた。

不意に、目の前が開けた。まぶしさに目を細めながらそこを抜けると、お座敷に父がいた。その隣には黒ずくめの男がいて、父となにやら楽しそうに話をしていた。

ふと父が私のほうを振り向いて口を開き――

ウサギとネコと・・・

生ぬるい空気のこの日、二つの影が水辺に佇んでいました。
深い深い、息のできる池の辺です。

足下には小さな花が咲き乱れ、空気は湿気を帯びてもや掛かっていました。

「魚がいるね」ネコが言いました。

「うん、たくさんいるよ」ウサギが答えました。

「ここになら、月光石、あるかな」ネコはしゃがんで草の上に手を付きます。

ネコが覗き込んだ池の水はとても澄んでいて、かなり深くまで見渡す事ができます。

「あるかもね」ウサギが答え、ネコに袋に入った細長いものを手渡しました。

「じゃ、行こうか」

「うん」

ザブンツと、服を着たまま二人は飛び込みました。

魚に気を付けてさえいれば、いつまでも水中に居られます。魚は彼らの好物であり、天敵もありました。魚は人より大きいので、飲み込まれてしまえばひとたまりもありません。

ネコは岩陰に落ち着くと、楽しそうにつり上がっている唇に、袋から出した笛を軽く当てました。

そこから、奇妙な旋律が紡ぎ出されます。

ウサギは答えるように自らの口で似たような音階を奏でました。

それは、魚には聞く事のできない、不思議な和音・・・

やがて

遠くから近くから、新たな旋律が生まれてきて、小さな丸い光が漂います。それは、ふわりふわりと曲に合わせてダンスをしました。

と、突然、ネコとウサギに近付いて来ていた月光石が、姿を隠してしまいました。演奏が中断されてしまったからです。

ネコとウサギは素早く水草の中に身を潜めていました。頭上を巨大な影が横切ります。

大きな大きなナマズでした。

ナマズは好食な上に大食いでした。

一日に自重の何倍もの食料を摂取するのです。

様子を窺っていたネコが、何かを見つけました。

ナマズは何かを追っていたのです。

今にもかぶり付きそうな勢いでした。

「人間だ！」ネコが叫びました。

「人間だ」ウサギが答えました。

二人は隠れていた水草の中から、同時に飛び出しました。

ネコの笛とウサギの口から、攻撃的な曲が奏でられます。矛先はもちろん、ナマズです。

ナマズは人間を追うのを止めました。

売られた喧嘩を二つ返事で買ったのです。

さあ、今度は二人が逃げる番です。ナマズがクルリと向きを変えらるなり、ネコとウサギは回れ右をして全速力で逃げました。

「ふう」

「行ったね」

しばらくの追いかけてこの末、ナマズを上手く撒く事のできた二人は、その場で再び月光石を おびき寄せました。
ところが、月光石の他にも・・・

「ありがとう」

人間がお礼を言って、握手を求めました。

「いえいえ」

「食べられなくてよかったね」

二人は順に握手を返しました。

「これは何と言う石なんですか？」

人間が尋ねるとネコとウサギは「それではあなたも一緒に集めませんか？」と、言いました。

深い池の底から、四つの声がします。

一つは笛で、一つは声。一つは歌で、一つは音。

それは不思議な旋律で

聞きゆくすべての生き物の心に響きました。

ウサギとネコと・・・ 2

虫の声が鳴り響き、澄んだ空気が辺りを包んでいます。

高く真つ黒な空には、明るく輝くまあるい月がポツカリと浮かんでいました。

月明かりの下を、二つの影がてくてくとススキの原を歩いていきます。

「明るいね」ネコが言いました。

「うん」ウサギが答えました。

ネコはお猪口^{ちよこ}と酒瓶を大事そうに持っています。ウサギはお皿に乗せたお団子を、大切そうに持っています。

「この辺のススキがいいかな」ネコがふと立ち止まって言いました。

「そうだね」ウサギも足を止めて、道端に生えたススキに手を伸ばしました。

そこへ、

「こんばんは」

小さな声が、たくさん重なって二人に挨拶しました。

ネコとウサギは辺りを見回し、最後に足元を見ました。

「ああ、ネズミのご夫婦とそのお子さん方。こんばんは」

「こんばんは、ねずみさん方」

「ネコさんとウサギさんも、お月見ですか？」ネズミのお父さんは、小さな小さな徳利を抱えて嬉しそうに笑いました。

「ええ」

「そうです」

「それでは、ご一緒しましょうよ。その方が賑やかでいいですもの。ねえ？」ネズミのお母さんがはしゃいで手を叩きました。その拍子に、お母さんの持つお団子が落ちそうになりました。

「せっかくの団子を落とさんでくれよ。それに、お月見は賑やかにするものじゃあない。しみじみ飲むものだ」

「僕達は構いませんよ」

「一緒に行きましょう」

二つの影に、小さな影が八つ、加わりました。

湖へとやってきました。

水中で呼吸のできる、あの湖です。

水面はまるで鏡のように真っ平らで、高く昇った月が、きれいに映り込んでいます。

お団子を持ったウサギと、ネズミのお母さんが水際にそれぞれ置きました。

続いて、二本のススキを持ったネズミの子供達が、わあっとお団子の前に置いて、戻ってきました。

最後に、お酒を持ったネコとネズミのお父さんが前に出て、ススキにお酒を振り掛けました。

「私達の分もお願いできますかね」ネズミのお父さんがネコを見上げました。

「ええ、いいですよ」ネコは頷き、一拍置いて、

「おいしそう…」

「だめ」

耳ざとく呟きを拾ったウサギが、ハッキリと言いました。

ちょっと残念そうなネコが力いっぱい、月の影目掛けてススキを投げました。

すると、

淡い月の光が空からと、湖からと伸びて、一本につながりました。月明かりの柱の中では、ふわりふわりと二本のススキが浮かんでいます。

しばらく何も起こりませんでしたが、次第にススキの形が崩れてきました。それと共に、キラキラと光の粉が月光の柱から噴出してきました。

「さあさ、たーっぷり浴びさせるのよっ！」ネズミのお母さんが、はりきってお団子を光へ近づけます。

ネコとウサギは少し離れて見えています。

「綺麗だね」

「うん」

月と粉の光に照らされて、ネズミ達の黒い影が楽しそうに踊っていました。

「おいしそう」ネコが呟き、

「だめ」すかさずウサギが止めました。

やがて、ススキがなくなり光の粉も振るのをやめた頃、月光の柱もだんだんと薄れていきました。

ネコとウサギとネズミ達は、月夜の景色を酒の肴に静かに飲み始めました。もちろん、子供達はジュースです。

「たくさん掛かったね」ネコがお団子を一つ、つまみました。

「うん」ウサギもお団子を手に取りました。

「甘〜いv v」先に食べたネズミの子共が、満面の笑みでとろけました。

「うん」

「甘い」

ネコとウサギも同感して、もひもひとお団子をほおびります。この時期にしか食べられない、月光の砂糖のかかったお団子は、特別甘いひと時をくれました。

「来年も晴れるといいね」

「そだね」

ネコとウサギはそろってまんまるお月様を見上げました。そして、ちゅうちゅううれしそうにお団子をほおぼるネズミ達を見て、

「…ダメ？」

「ダメ」

ネコはウサギに怒られました。

ウサギとネコと・・・3

陽の光りがさんさんと降り注ぐ、とても暑い日でした。

いつものようにネコとウサギが二人仲良く歩いています。

彼らの行く手には、大きな森がありました。何かを採りに行くのでしょうか。

森の中では小鳥が歌い、いろんな動物達が道行く二人をチラチラと覗き見ています。リスの奥さん方は今の話題に彼らの話を加えたのでしょうか。明るい笑い声が木霊しました。

森には、たくさんの木が生えていましたが、暗くはありませんでした。むしろ、丁度良い木陰で風が通るので涼しいくらいです。

さて、二人が青々と茂る草を掻き分けて森の奥へ進んでいきますと――

「あったね」

ネコがふうっと、息をつきました。

「うん」

ウサギも額の汗を拭きました。

ぽっかりと開けた小さな広場。そこは、地面いっぱいにつたが這っていました。色濃くツヤツヤしたツタの間には、同じくツヤツヤした丸いものがあちこちに転がっています。

「冷たいね」ネコが丸くてツヤツヤしたものを一つ取りました。

「おいしそうだね」ウサギはカバンから包丁を取り出しました。

サクッと、丸いツヤツヤしたものに刃を通すと、何とも言えない甘くさわやかな香りが辺りに満ちました。

「いい香り」ネコが満面の笑みで真っ赤な中身の香りを吸い込みました。

「食べよ」ウサギが早く早くと急かしました。

シャクシャクシャク

シャーベットの冷たさが、火照った体を冷ましてくれます。
口いっぱい広がる甘い甘い果物の味が、二人の顔をほころばせました。

「いいね」ネコが口の周りをペロリとしながら言いました。

「最っ高」ウサギは手に付いた汁を舐めました。
と、そこに、

「ノン ノン ノン♪」

大きな大きな体が、のっしのっしとやって来ました。

「カピバラさんだ」

「カピバラさんだね」

「やっ、ネコさんにウサギさん。奇遇ですな。あなた方も……？」
カピバラさんは頭にちよこんと乗せていたシルクハットをひょいと上げて、あいさつしました。

「ええ」

「だいぶ涼しくなりました」

「そうですね。では、僕もあちらの方で。またお話ししましょう」

「ええ、ぜひ」ネコは満面の笑みでお別れを言いました。

「ではまた」ウサギは手を振ってカピバラさんを見送りました。

「……………」

「……………」

「さすがに、た——」

「——べちゃダメ」

ヨダレをすすったネコの頭をペシリと叩きました。

それから二人は涼しくなった体を横たえて、ぼーっと雲を眺めました。

一方、カピバラさんは――

「ノン ノン ノン♪」

と、気に入った場所で果物のシャーベットをいくつも一箇所に集めました。

「ノーン ノン♪」

ある程度集まると、カピバラさんは目を糸のように細めて、ニンマリ微笑みました。そして手を合わせて、

「いただきまーす の 召し上がれっ」

で、ガブリとシャーベットにかぶり付きました。

ものすごい勢いです。

ジャクジャクと、次々に集められたシャーベットが消えていきます。

三十分もたった頃、カピバラさんはポコリと出っ張ったお腹をさすって、満足そうに溜息をつきました。

「いい感じ？」

「いい感じ」

すっかり涼しさを満喫したネコとウサギは、先程カピバラさんが行った方向へ足を向けました。ところが――

「あっ」

「ありやりや」

「寒いよ、寒いよお」

お腹をまん丸にしたカピバラさんが、ツヤのあるツルの中でうめき声を上げていました。目の端からこぼれた涙はコロコロと氷の粒に

なり、草の上でゆっくりと水になりました。吐く息さえも氷になって出ていきます。

「冷たい」

ネコがカピバラさんの腕に触ると、氷のようでした。

「食べ過ぎたね」

ウサギは腰に両手を当て、呆れました。

「たったたた助けてえ。寒いよぉ」

カピバラさんはポロポロと氷の涙を流します。

「氷になるよ」ネコは意地の悪い笑顔を浮かべました。

「がめついた報いだね」ウサギは大きく溜息を吐きました。

「謝るから助けて」

「仕方ないな。行く？」ネコは腕組みしながらウサギに目配せしました。

「行こうか」ウサギはカピバラさんの腕を掴みました。

「行つてゝえ」

カピバラさんは泣きっぱなしでした。

「……お、重い……」ネコは息を切らしながら呟きました。

「地面に沈みそう……」ウサギも悪態を吐きました。

「すみません」

カピバラさんは申し訳なさそうに、氷の涙を落としました。

森を抜けて、川まで来ました。そこは何故か、もくもくと湯気が立っています。

「ちょっと待っててね」ネコがカピバラさんを川縁に座らせました。「すぐ終わるから」ウサギはポムポムとカピバラさんの頭を叩きました。

ネコとウサギは、ザックザックと川辺の砂利を掘り起こします。少しして、じわりじわりとお湯が湧いてきました。カピバラさんが入るのに丁度いい大きさになる頃には、穴にはたっぷりの温泉が張られていました。

「よく温まってね」ネコはカピバラさんの後ろから肩にお湯をかけてあげました。

「体内の氷が解けるからね」ウサギは前から頭にお湯をかけます。

「気持ちいい」

カピバラさんは、これでもかと言うぐらい目を細め、のほほんとした表情になりました。

「あ……」

「僕らのも抜けるね」

そうしていると、ネコとウサギとカピバラさんの温まった体から、シュウシュウと湯気が立ち始めました。

それは高く高く上ってゆき、頭上で小さな塊を作りました。

「あれはなんなの？」

カピバラさんは“のくん”とした顔で尋ねます。

「そのうちわかるよ」

「お楽しみ」

パシャパシャとやっているうちに、空の塊は、中くらいの雲になりました。

「できたね」

「そうだね」

ネコとウサギが、ピクリと耳を立てます。

「あゝ」

カピバラさんは、“のくん”とした顔のまま、感嘆の声を上げました。

中くらいの雲からは、真夏の太陽に負けないよう、大きくしっかりと雪の結晶が舞い降りてきます。

しっかりとしているのに、ふわりふわりと漂う結晶は、再び三人の

体をひんやりと涼しくしてくれました。

それからというもの

冬の寒い日には、そここの温泉で“のーん”とした顔のカピバラさんがお湯に浸かっているのを目にするようになりました。

「気に入ったんだ」

「気に入ったんだね」

ネコとウサギは、二人仲良く熱^{あっかん}爛の杯を交わしながら、それを眺めていました。

ウサギとネコと。．．4

「桜だね」

「春だね」

春うらら、春眠の季節。桜の木は大きな花を枝いっぱい咲き誇らせ、甘い香りを運んでいます。ミツバチ達はせっせとあま〜い蜜を集め、孵ったばかりのオタマジャクシは気持ちよさそうに田んぼを泳いでます。

毎度おなじみのネコとウサギは、それぞれ大きなカゴを持って桜並木道をゆったりと歩んでいました。あちらこちらでわいわいと、楽しそうな声がします。

「楽しみ？」ネコが尋ねました。

「楽しみ♪」ウサギが答えました。

「僕も♪」

「うん♪」

二匹は、ざわめきから少し外れた川べりに来ました。立派な枝垂柳と枝垂桜のある川です。

「穴場、穴場♪」

「貸切、貸切♪」

二匹はいそいそと支度をしました。

「では」

「では」

カチンと、軽やかなグラスの音が静かに木霊しました。おちよこの中身を一息に飲み干します。

「美味、美味」

「甘露、甘露」

「絶景かな」

「絶景かな」

「まっこと、まっこと」

いつの間にやら二匹の間には、十センチほどの小さなお爺さんが座っていました。

「こんにちは。あんまり楽しそうなので、お邪魔させていただきましたよ」

お爺さんは長いヒゲと眉毛に覆われた顔を、クシヤリと歪めました。笑ったのでしょう。二匹は快く受け入れました。

風が優しく吹いて、ハラリハラリと花びらが舞います。

二匹とお爺さんは、ただただ静かにそれを眺めていました。

日が落ち始め、風も冷たくなってきました。二匹は上着をはおりましたが、お爺さんはそのままです。

「寒くない？」

「風邪ひかない？」

ネコとウサギが心配しますが、お爺さんは「慣れとるで大丈夫じやよ」と、ほろ酔い加減で答えました。

「それよりも、昼の桜、黄昏の桜と見て、夜桜まで楽しむとは…

：どうしてなかなかよい趣向ですのう。お二人は毎年こちらに？」

「ええ」

「この場所を見つけてからは」

「そーですか、そーですか。それは、それは……」

お爺さんはもにもによと何かを言いましたが、聞き取れませんでした。

月が昇りました。

綺麗な三日月です。

杯に、桜の花びらが舞い込みました。

月の光が、杯に映り――

「あれー？」

「ここどこ・・・？」

二匹は不思議な所にいました。

水面に映る大きな三日月。月の影にそって桜の花びらが揺らいでいます。

水面の向こうが現実の場所のようでした。二人は水の裏側へ来てしまったようです。

『こんなにも楽しんでくれているのだから、少しばかりのお礼だよ。楽しんでおくれ』

どこからか、お爺さんの声がしました。

ヒラリヒラリと舞う花びらがキラキラ光り、まるで夜空の星が降ってくるようでした。

「これはなかなか……」

「運がいいねー僕達」

この世のものではない声が、高く、低く、歌っています。
それは常世の声。
それはかの地の声。
ゆるゆると
ゆるゆると．．
長く、長く……

雨上がりの日に

水たまりに映った世界

飛び込むと別世界

全てが逆さまで

地面が空で

空が地面で

お家は上から生えていて

人が空を歩いてる

水たまりの中の人

現実にいる人達と全く一緒に

ただ

いろんなところが逆さま

利き手も逆さま

性格も逆さま

おんなじ顔で

逆の事を言う

上から生えたお家には

誰も行かない

だって

届かないから

だから

水たまりの中の人

雲に住んでる

全てがふわふわ

全てがふかふか

まるで

温度のない水のように

いつでも

気持ちのいい風が吹いている

水たまりの中の人

お米の代わりにお魚を食べる

空を泳ぐ

大きなお魚

必要なだけ獲って

みんなで分ける

仲が悪くても

必ずみんなで分ける

果物や野菜は

時々空の地面に生えてる木から

落ちてくる

それはいつでも食べ頃で

やっぱりみんなに分けられる

水たまりの中の世界は

とても穏やかで

けど

些細な事で壊れてしまう

とても繊細で

とても儂い

風が吹いただけで揺らぐ世界は

羨望の虚像

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3476k/>

短編集

2011年1月9日17時38分発行